

温故知新、恵那高創立 100 周年!!

大正 11 年（1922 年）、旧制恵那中学校として開校した母校恵那高校は、2 年後の令和 4 年創立 100 周年を迎えます。

同窓会では、この節目の年を迎えるにあたり実行委員会を立ちあげ、「温故知新、恵那高創立 100 周年」を旗印に、一世紀に渡る歴史を振り返り、その上に更なる飛躍を期し、何を未来に残すべきかと検討を重ねてまいりました。

3 年前の 3 月、母校に高校受験者数の大幅定員割れという事態が起きました。「恵那高校大丈夫か」との声は皆さんの耳にも届いたことと存じます。流言飛語も飛び交いました。しかしながら、この 3 年間で本校に対する声は大きく変化し、悪い噂は聞こえなくなり、評価は V 字回復しました。

V 字回復を為しえた要因は、複数あります。その最たるものの一つが、国公立大学への推薦入学合格者数の大幅な増加です。

学力検査、とりわけペーパーテストのみでの合否判定には無理があると、入試改革が叫ばれて久しいのはご承知の通りです。現在、国公立大学では推薦入学者数を 3 割にまで増やす方針を打ち出しています。それは、口頭試問を取り入れ、基礎的な学力に加え発想力、コミュニケーション能力などの総合力を入学の判断基準にしようとする方向性からです。

ここに輝かしい数値があります。平成 30 年度、恵那高校からの国公立大学推薦入学者数は、岐阜県トップの岐阜高校に 1 名と迫る 33 名でした。卒業生数が 129 名も少ない中で僅か 1 名の差でした。因みに多治見北高校は、合格者 8 名でした。合格率では本校は間違いなく県下 NO.1 です。

また、令和元年度の国公立推薦入学者数を見ても中部 5 県の公立高校の中で恵那高校は 6 位、しかし卒業生数に対する合格率ではトップだと思われます。また、特筆すべきは、この数値は、先に述べた本校が大幅な定員割れをした年の新入生の成果です。これはいかに恵那高校で過ごす三年間が価値あるものかを物語っています。

恵那高校には、こうした素晴らしい成果を生み出す仕組みが存在します。代表的なものを二つ紹介します。一つは、4 期（1 期 5 年）連続して指定され、国より多額の事業支援を受ける SSH（スーパーサイエンスハイスクール）です。

そして、もう一つは普通科を中心とする「課題研究」です。この取り組みは、テーマを見つけて探求学習することにより、課題発見力を養うというもので、前述の秀でた数値の源となっています。その他にも地球塾、田舎塾、ミニ教育実習、各事業所でのインターンシップ、クラブ活動、様々なボランティア活動など等があります。

この様な、ソフト面での仕組みが幾重にも重なり現在の恵那高校で学ぶ魅力を創り上げています。時代は刻々と移り変わります。SSH も 5 期の指定には相当の支援が必要です。でも、同窓会としては、例えどのように状況が変化してもこうした恵那高の強みとなっている事柄を継続して運営出来るよう支援をしていきたいとの想いでいます。

視点を変えます。本校の使命は、官民を問わず様々な分野において地域をリードしうる人材を育てることにあります。その根底に位置するものは、教育の質的向上に他なりません。残念ながら、当地域の諸学校には、地元出身の教員が圧倒的に不足しております。ここに他地域と比較し当地の高校受験者にやや不足が見られる真因があるのではないかと考えます。中長期的に見る必要はありますが、こうした観点から当地の将来を見据えた方略を構築できたらと考えます。

具体的には、ハード面では花の木会館を現在以上に自学自習、探究活動のできる環境へとリフォームしてはどうでしょうか。しかしながら、「仏作って魂入れず」では目的達成には至りません。ソフト面での構築も必要があります。

そこで、現役大学生を勉学のアドバイザーとする「塾」的なものを開設し、その運営を同窓会で行うという案です。こうした取り組みが卒業生の母校愛、地元愛を育み、前述の地元出身の教員不足解消を始め、地域貢献する機運を高める効果も望めるのではないのでしょうか。また、こうした動きは教員の働き方改革と生徒の時間外学習の場を両立し、保護者の皆さんの経済的な負担軽減するという恵那高校の新たな魅力になり得ると考えます。

以上の想いを同窓生の知恵と工夫と努力で実現させ、より魅力的で輝く恵那高校を創り上げることを、100周年記念事業に対する会長案とさせていただきます。

令和2年7月8日

岐阜県立恵那高等学校創立100周年実行委員長

岐阜県立恵那高等学校同窓会会長 阿部伸一郎